3　水上　瀧太郎文学碑

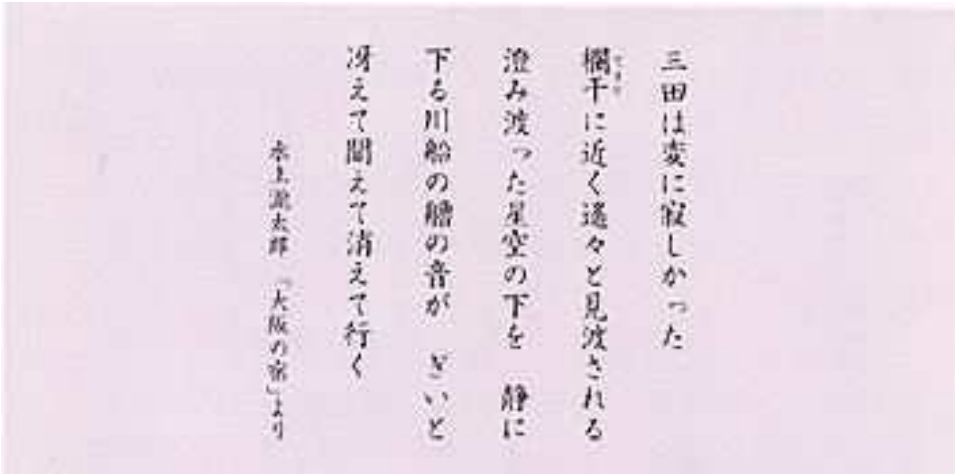
■場所

北区中之島三丁目

中之島遊歩道内

■交通

地下鉄：肥後橋(4 号出口)



水上　瀧太郎(1887 年～1940 年)

水上瀧太郎(本名　阿部章蔵)は、明治 20 年(1887 年)東京都麻布区飯倉町三丁目(現港区麻布台二丁目)に生まれ、昭和 15 年(1940 年)3 月 23 日死去した。

御田小学校(現港区立御田小学校)、慶応義塾普通部を経て慶応義塾大学にすすんだ。兄の蔵書で文学への目が開かれ、泉鏡花、与謝野鉄幹・晶子に心酔した。

大学在学中の明治 44 年、永井荷風の主宰する『三田文学』に「山の手の子」を発表し、久保田万太郎とともに三田派の新進作家として注目をあびた。

明治 45 年大学卒業後、アメリカのハーバード大学に留学し、その後ロンドン、パリを経て大

正 5 年帰国、父の創業になる保険会社に入社した。以後、死去するまで「会社員としては最も勤勉であり、作家としては最も純粋」をモットーとして二重生活を続けた。

大正 6 年、大阪支店副長として赴任し、大正 8 年東京に戻るまでの間、東区島町一丁目の高橋館や西区土佐堀通二丁目の照月旅館に止宿した。

大正 15 年、休刊となったいた『三田文学』を復活し、名実共にこれを主宰して同誌を中心に活躍する一方、後進の育成には特に力を尽くした。その作風は、当初の抒情的傾向から次第に現実主義に移行し、さらにロマンティシズムとリアリズムの渾然と融合した作品を経て、晩年の円満な作風を大成したといわれている。

代表作「大阪の宿」は、長編小説「大阪」と姉妹篇的な構成をとった作品で、主人公をめぐって大阪人気質の様々な登場人物を配し、水の都のそこはかとない哀愁と季節の移り変わりを淡々と描いたもので、市井の日常にあわただしく生きながらも、しみじみと生の美しさを感じさせてくれる作品であると評されている。

墓所は、東京都府中市多磨町四丁目の多摩霊園。